

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ  
Quarterly magazine FOYER  
2022 winter

015

# FOYER

つながる、ひろがる、あつまる  
ほわいえ

moving theater 5 Stories

Special feature

県立劇場開館40周年記念事業  
「動く劇場 ~5 Stories~」

第64回熊本県芸術文化祭スペシャルステージ  
ONE PIECE × 人形浄瑠璃 清和文楽  
超駟鹿船出冬桜 ちよっぱあふなでのふゆざくら

ベルリン国立歌劇場管弦楽団  
(シュターツカペレ・ベルリン)



## ウィーン・プレミアム・コンサート 熊本公演

管弦楽：トヨタ・マスター・プレイヤーズ、ウィーン



### 指揮者なしのベートーヴェンの奇跡

人気実力派ピアニスト・小曾 優が初共演！  
不朽の交響曲「運命」とピアノ協奏曲、  
さらに大ハープの代表曲など  
珠玉のプログラムをお届けします。

J.S.バッハ：管弦楽組曲 第2番 ロ短調 BWV1067  
(フルート独奏 エルヴィン・クランパウアー)

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 Op.37  
(ピアノ独奏 小曾 優)

J.S.バッハ：オーボエとヴァイオリンのための協奏曲 ニ短調 BWV1060  
(オーボエ独奏/ベルンハルト・ハインリヒス、ヴァイオリン独奏/フォルクハルト・シュタイア)

ベートーヴェン：交響曲 第5番 ハ短調「運命」 Op.67

主催：トヨタ自動車株式会社 共催：KAB熊本朝日放送  
協賛：熊本県立劇場 協力：トヨタ自動車株式会社、トヨタ販売店グループ

後援：オーストラリア大使館/オーストラリア文化フォーラム東京、オーストラリア政府観光局

4月15日(土)14:00開演(13:15開場)

熊本県立劇場コンサートホール

S席8,500円 / A席6,500円 / B席5,000円

ハッピーシート 2,000円(22歳以下(公演当日)の小学生、中学生、高校生が対象です)

チケットぴあ (Pコード228-772) <https://w.pia.jp/t/tmp/>

イープラス <https://eplus.jp/tmp/>

熊本県立劇場 <https://www.kengeki.or.jp/> ☎096-363-2233

ローンチケット(Lコード82474) <https://l-tike.com/>  
ほか曜日プレイガイド、大谷楽器\*で販売 \*H&M/ハッピーシートとの併売なし

◎お問合せ/KABイベント☎096-359-9051(平日10時~17時)

日常に、劇場を。



Life with a Theater.

熊本県立劇場  
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】  
公益財団法人 熊本県立劇場  
熊本市中央区大江2-7-1 ☎862-0971  
[www.kengeki.or.jp](http://www.kengeki.or.jp)

【編集・制作・印刷】  
株式会社 ジャム  
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 ☎860-0017  
[www.jam-cf.com](http://www.jam-cf.com)

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ 2022 winter 発行日:2022.12.20 ※掲載内容は11.30現在のものです。

いつでも、  
どこへでも。  
誰かの日常に、  
劇場を届けたい。

うっすらと広がる朝霧の中に、響き渡る弦楽四重奏のしらべ。そのステージとなっているのは、阿蘇五岳を望む収穫を終えた田んぼのまんなか。いつもの、なにげない阿蘇の日常の中で突然開かれた演奏会は、この場所にとっては非日常のものかもしれない。ただ、空気の震えとともに、風によって運ばれる音色に呼応するように、遠くでモオと啼いている牛や、時折霧を吹き消す風の音が重なって、非日常の光景が、日常のものに馴染んでいく、不思議な世界ができあがっていく瞬間がありました。県立劇場開館40周年を記念して制作が進んでいる「動く劇場〜5 Stories〜」の阿蘇編は、そんな風景から幕を開けました。



## moving theater 5 Stories

### 世界に誇れる熊本を舞台に、熊本のアートシーンを世界中へ

日常に、劇場を。



Life with a Theater.

劇場というのは、ホールの重い扉の中の、ある意味閉ざされた空間で、そこで起きることや、心動く瞬間をホール内の人たちと共有する特別な場所です。2022年、開館40周年を迎えた県立劇場が掲げたのは、「日常に、劇場を。」というテーマ。食べて、寝て、笑って、泣いて、学んで、語り合ってください。ふだんの暮らしの中で、もっとも日常から離れているような劇場にふれて、感じ取ってほしい。長い歴史を重ねてきたからこそ、たどり着いた、劇場からのメッセージを込めた

テーマでもあります。40周年の記念事業のひとつとして、「動く劇場〜5 Stories〜」と題した動画プロジェクトがはじまっています。このプロジェクトは、世界遺産などに登録されている、熊本が世界に誇る地域で、熊本出身、熊本にゆかりの深いアーティストがパフォーマンスを行い、熊本を拠点に活動するクリエイティブチームが動画作品を仕上げるというもの。「日常に、劇場を。」を共通のテーマとし、阿蘇、崎津集落、三角西港、万田坑、八代妙見祭の5つの

舞台で、5つのチームが、それぞれに抱く熊本への思いをのせたパフォーマンスを行い、ストーリーのある映像作品を制作中です。このプロジェクトの大きな特徴は、自分の色を大事にしているアーティストやクリエイターを、それぞれの地域ごとに組み合わせること、そこから何が生まれるのか予測不可能な化学反応にあります。その地域のことを思う心、観る目線、感じる音が渾然一体となり、どんな作品に仕上がっていくのか、期待は高まるばかりです。

県立劇場開館40周年記念事業「動く劇場〜5 Stories〜」の阿蘇編は、阿蘇五岳を望む田んぼの中からスタート。少しずつ晴れていく朝霧の中、寒さも吹き飛ばすような美しい弦楽四重奏の演奏が繰り広げられた



(上)三角西港で行われたマーチングの撮影模様  
(下)専修大学玉名高等学校での撮影模様

「動く劇場〜5 Stories〜」プロジェクトは、  
熊本県立劇場の公式YouTube  
「ケンゲキアートチャンネル」で公開中



「動く劇場〜5 Stories〜」プロジェクトの作品は、県立劇場の公式YouTubeチャンネル「ケンゲキアートチャンネル」で、完成した作品から順次公開されます。12月中にはプロジェクト第一弾となる「三角西港 × マーチング」の動画が公開され、その後に第二弾、三弾と公開が控えています。熊本に関わりのある人たちが、熊本の各地域で、いろんな地域の人を巻き込みながら、プロジェクトは進んでいます。

■アーティスト・クリエイター紹介

【三角西港】(宇城市)  
Ventures 専修大学玉名高等学校吹奏楽部(マーチング)  
映像制作/Hub.craft inc.

【阿蘇】(阿蘇市)  
緒方愛子、黒葛原康子、早田類、渡邊弾奏(弦楽四重奏)  
映像制作/中島昌彦

【八代妙見祭】(八代市)  
本田浩平(津軽三味線)、高田大介(太鼓)  
映像制作/株式会社AREA

【崎津集落】(天草市)  
亀子政孝(コントラバス)  
映像ディレクション/佐藤かつあき

【万田坑】(荒尾市)  
葉山悠介、小山咲、鹿間れいあ(コンテンポラリーダンス)  
音楽・ディレクション/吉田敬



弦楽四重奏:  
ヴァイオリン/緒方愛子、黒葛原康子  
ヴィオラ/早田類、チェロ/渡邊弾奏

いただいたスコアを見て、まず冒頭部分から阿蘇神社の風景が浮かび上がってきました。ふだんは楽器のメンテナンス上、屋外で演奏することはありませんが、朝一番で田んぼの中で演奏した時は、自然と一体となる不思議な感覚がありました。音色の引き出しがひとつ増えたような気持ちになりました。牛の啼く声や、風の音、スケールの大きい自然からエネルギーをもらいました。音楽をやってきて良かった、と心から思えたひとときでした。



撮影監督:中島昌彦

阿蘇の日常をクラシックの演奏で表現することで、日常というものが少し違った見え方になるのでは、という仮説を立てて企画しました。阿蘇を造ったとされる神様が祀られている阿蘇神社にヒアリングを行い、阿蘇の草原を研究している大学教授から学びを得ながら、阿蘇という地域と向き合い、音楽と映像の企画を組み立てました。当初は既存の曲から選定を予定していましたが、別プロジェクトで縁のあった寺嶋さんに相談したところ、オリジナル楽曲の編曲を快諾していただきました。阿蘇そのものを県立劇場の舞台に見立てて、ロケーションを選定しています。音楽や芸術が、日常を明るく照らす光として助けになることを切に願っています。



阿蘇大展望での撮影は、撮影場所として選んだスポットに行くまで、楽器を大事に抱えて歩く演奏者の姿が印象的

「動く劇場〜5 Stories〜」プロジェクトで制作中の5つのチームから、今回は阿蘇で行われた撮影に同行しました。世界有数のカルデラを誇る阿蘇を舞台に、動く劇場プロジェクトの演奏を担当するアーティストは、このプロジェクト限定で結成された弦楽四重奏団です。アウトリーチ事業の協力アーティストであるヴァイオリンの緒方愛子さんの呼びかけで集まったアーティストは、ヴァイオリンの黒葛原康子さん、ヴァイオリンの早田類さん、チェロの渡邊弾奏さん。そして、その演奏を動画作品としてつくりあげるのには、阿蘇を拠点に活躍している映像クリエイター中島昌彦さんです。撮影初日の最初のカットは、前述した阿蘇の日常そのものといえる田んぼの中。火山信仰のある阿蘇には、山の神様が人々が暮らす里に下り、田んぼの生育を見て回る「御田祭(おんだまつり)」というお祭りがあります。この火山信仰をベースに、カルテットを4基の神輿に見立て、山にいる神様が里に下り、そして山に帰っていく一連の流れをストーリーの核としています。そのストー



リーを際立たせているのは、作曲家の寺嶋民哉さんの手による阿蘇のたのめ楽曲。撮影1週間前に届いたというそのスコアは、まるで阿蘇の風景が浮かびあがってくるようなものでした。映画音楽を数多く手がける寺嶋さんから受け取った楽曲と、それぞれの熊本への思いをのせたカルテットの演奏、そして活火山と共存する阿蘇の歴史と日常を紐解いたストーリーが、どのような化学反応を起こすのか。阿蘇と弦楽四重奏の動画の公開は、2022年の末から2023年の年明けあたりになる予定です。

演奏者をさまざまな角度から切り取っていく撮影スタッフたち

## Highlight

第64回熊本県芸術文化祭スペシャルステージ  
ONE PIECE × 人形浄瑠璃 清和文楽  
超馴鹿船出冬桜 ちよっぱあふなでのふゆざくら

『ONE PIECE』の世界と伝統芸能の  
融合が新たな舞台芸術へ

熊本県芸術文化祭のスペシャルステージとして上演された、人気漫画『ONE PIECE』を題材とする人形浄瑠璃 清和文楽の新作「超馴鹿船出冬桜(ちよっぱあふなでのふゆざくら)」。

熊本県出身の漫画家・尾田栄一郎氏が描く漫画と、熊本県の重要無形文化財である清和文楽がコラボレーションすることで、舞台芸術の歴史に新たな1ページが刻まれました。話題となった『スーパースターII ワンピース』プロジェクトにも携わっていた総合演出・音楽監修の藤原道山氏、脚本・演出を担当した横内謙介氏は、人形浄瑠璃との舞台づくりを「大冒険だった」と表現しています。客演としてアニメ『ONE PIECE』の主人公モンキー・D・ルフィの声優を務める田中真弓さんがスペシャル浄瑠璃太夫、

25048の倉野尾成美さん(熊本県出身)がスペシャルせりふ太夫として参加し、舞台を華やかに彩りました。物語の舞台は青島のトナカイ、チョッパーが、ルフィ一行の仲間となるきっかけとなったドラム王国(冬島)。舞台上(かみて)の太夫の浄瑠璃と、下手(しもて)に並ぶせりふ太夫の語り、そして舞台上でダイナミックに繰り広げられる展開は、人形浄瑠璃の世界観を守りつつ、その概念を上書きするような魅力にグイグイと引き込まれていきました。

舞台のオープニングを彩った山鹿灯笼踊りをはじめ、宇土雨乞い大太鼓、せりふ太夫の熊本演劇人たち、白ウサギに扮したキッズダンサー、清和文楽の地元である清和小学校、清和中学校、矢部高等学校の生徒たち、そし



©尾田栄一郎/集英社 ©清和文楽新作制作事業実行委員会

2022年11月5日(土)・6日(日)  
演劇ホール

てこの舞台に一般公募で県内外から選ばれた市民浄瑠璃隊と、熊本県の芸能界と市民の力を結集したキャストたちが、2日間の舞台を全力で演じきり、カーテンコールは圧巻でした。

## Highlight

熊本県立劇場開館40周年記念事業  
クリスティアン・ティールマン指揮  
ベルリン国立歌劇場管弦楽団



©studio1015 Manami Kuroki

12月2日、コンサートホールが重厚な音楽で満たされました。世界最古級(1570年創立)のオーケストラ、ベルリン国立歌劇場管弦楽団によるブラームスの交響曲第3番と第4番。分厚い弦の響きと燦されたような管楽器の独特の音色は、満席の聴衆を魅了しました。

コロナ禍突入以降、県劇で初の海外オーケストラ公演がこのベルリン国立歌劇場管弦楽団公演となりました。当初は音楽監督のダニエル・バレンボイムとのツアーが予定されていましたが、バレンボイムが健康上の理由で降板となり、代役としてシュタイツカベレ・ドレスデン首席指揮者のティールマンが登板。バレンボイムの指揮を期待していた皆様にはたいへん申し訳なかったのですが、世界的巨匠・ティールマンとベルリン国立歌劇場管弦楽団は極上のブラームスを届けてくれました。

鳴り止まない拍手にティールマンは2度のソロ・カーテンコールで応えて

2022年12月2日(金)  
コンサートホール

くれ、「満席でマナーのよい観客、響きの素晴らしいホールに大いに満足している。40周年心からおめでとう」というコメントを残しています。

### S席に子ども300人を招待

開館40周年記念企画として、本公演では小学4年生から18歳までの青少年300人を招待する「特別子ども無料招待」を実施しました。

いわゆる子ども向けプログラムではない、本格的な海外オーケストラ公演を子どもたちが鑑賞できる機会は限られています。できる限り良席で聴いてもらおうと、今回はS席を招待エリアとしました。申し込んだ子どもたちの大半にとって初めての海外オーケストラ鑑賞ということで、県劇では希望者に事前レクチャーを実施。鑑賞マナーや楽曲について学んでいただきました。当日子どもたちは素晴らしいマナーで楽しんでくれたようです。無料招待で来場した9歳の男の子は「初めて緊張したけれど、すてきな演奏でその緊張がなくなりました。とってもすてきな演奏がきけてとっても幸せです」と話してくれました。



指揮/クリスティアン・ティールマン  
©studio1015 Manami Kuroki

横島潟担い(がたいない)節  
保存会



横島潟担い節保存会の皆さん。前列の子どもたちは、右から鎌田朱音さん、鎌田紅葉さん、島木ひよりさん、鎌田悠花さん、白水結菜さん、小柳美鈴さん

有明海の潮の満ち引きでできる干潟に目をつけた加藤清正公が手がけた石塘築堤工事をきっかけに、約400年前からはじまった玉名市横島町の干拓事業。いちごやトマトなど、豊かな農作物に恵まれるこの土地は、長い期間をかけて完成した干拓工事によってできています。土木機械が導入される昭和初期までは、潟(土)を切りだし、天秤箆で重い潟を運ぶ作業を人力で行っていました。

この時に作業中につけ声のように歌われていた、いわゆる労働歌に、1967年の5月末に潮止め工事が完成したことをきっかけに、曲と踊りが付けられたのが「横島潟担い(がたいない)節」です。工事の完成を祝う祝賀会で、当時の婦人会によって踊りが披露されました。昭和の終わり頃には、一時途絶えたこともあったものの、1995年に県立劇場の「いま、菊池川は流れる」の事業で菊池川流域の文化掘り起こしが行われ、横島潟担い節が復活した背景があります。

土地の記憶を  
次の世代へ  
節と踊りでつなぐ

踊りは潟を切りだす男役と、潟を箆で運ぶ女役の二人一組で、お囃子に合わせて潟担いの作業が繰り広げられます。海水を含んだ重い潟を切り出す動き、潟を運ぶ時の特徴的な足取り、高く積み上げられた堤防を梯子で登る様子が踊りの中に込められ、当時の作業の様子が目に浮かぶようです。

この「横島潟担い節」を後世に残すために活動する保存会は、子どもと大人合わせて15名。月に2回、横島町の公民館で練習を行い、地域のイベントがあれば参加し、潟担い節を披露しています。小学生の頃から練習に通っている中学3年生の鎌田朱音さんは、おばあちゃんから誘われたことから参加。「最初は難しかったけど、練習するうちに楽しくなってきた。できれば、これからも続けていきたい」と語ってくれました。潟担い節は、厳しい環境の中働く人たちが励まし合ってきたもの。今後もこの文化を残すために、活動に参加してくれる人を広く募集しています。



横島潟担い節保存会の窓口である木村総子さん



小学生、中学生の子どもたちは、月に2回の練習会を楽しみにしている。子どもたちには、男役が人気

【横島潟担い節保存会】 090-9070-8796(木村) 090-5797-5984(関) 090-8298-3099(大崎)

熊本県民第九の会

県劇の歴史とともに歩んできた  
熊本でお馴染みの第九の会

熊本の年末の風物詩といっているほど、師走おなじみの行事となっている「熊本県民第九の会」の演奏会。1982年12月の熊本県立劇場の落成を祝うことから落し物のひとつとして企画されたことがきっかけで、実行委員会が結成され、呼びかけによって集まった合唱団と、熊本交響楽団の演奏によって第一回の演奏会が開かれました。県立劇場のコンサートホールでのベートーヴェン交響曲第九番の演奏会は、満場となった会場に感動の渦を巻き起こし、次の年からの演奏を強く要望する声が多く、毎年年末の恒例行事として開催されるようになりました。まさに県立劇場の歴史とともに歩んできた演奏会です。第一回の演奏会から数えて37回目の演奏会が今年開催されます。コロナ禍での開催自粛の2年間を経て、「今年こそは必ず実施する」と実行委員会は年頃から意気込み準備を進めてきたといいます。第一回の演奏会から参加している「熊本県民第九の会」の実行委員長である神田さんは、「今年の第九の会は、今

までとひと味違う演奏会を企画しています。初の試みで、初演となる交響詩「火の国旅情」を演奏します」と語ります。コロナ禍前までの演奏会では、多い時で約300人の合唱団が舞台を彩っていました。今年も約半分の人数で構成されているとのこと。それでも3年ぶりとなる演奏会に、周囲からの期待も高まっています。

実行委員会は毎月開催されており、2年先の演奏会の企画まで話し合いが行われています。合唱団は経験者の登録団員と、その年の6月から7月にかけて募集される人たちが構成されます。毎年楽しみにしている人も多く、天草、阿蘇、人吉から泊まり込みで練習にくる人もいます。毎年指揮者やソリストを招聘して開催していますが、今では国際的な指揮者となった山田和樹さんが練習指揮を担当したことも。素晴らしい思い出です」と事務局長の坂口さん。練習は毎回和気あいあいとした雰囲気が進められ、いつも通りの県劇の師走の風景が見られそうです。



神田 一伸  
[かんだ かずのぶ]  
熊本県民第九の会  
実行委員長

坂口 幸男  
[さかくち ゆきお]  
熊本県民第九の会  
事務局長



コロナ禍直前に行われた「熊本県民第九の会」演奏会。合唱団は、毎年身長、年齢、性別さまざまな観点から、並び順を決めるのが苦労するとか。壇上に並ぶ合唱団は圧巻

熊本県民第九の会 | <https://klab2018.sakura.ne.jp/kumamotodaiku>

舞台さんのお仕事道具

なぐり

いつも県劇舞台スタッフが書いている「舞台さんのお仕事道具」ですが、今回は熊本県の舞台美術・道具製作会社である吉本美術の吉本貴一さんにお話を伺いました。舞台美術と言えはこれでしょうと自信を持ってご紹介いただきました。

一般に「金槌」と呼ばれる釘を打つ大工道具を、舞台現場では「なぐり」「芝居なぐり」と呼びます。一般の金槌よりも柄が長いのが特徴で、頭部分は、釘を打つために使い、もう一方は釘を抜くために使います。釘打ちのコツは、力で叩きつけるのではなく、肘から先で振り下ろして先の金具の重さで釘を叩き込むこと。吉本さんは真っ直ぐな柄の下



写真左が現場用なぐり、右が作り物用なぐり

側をわざと切り落として角度をつけていました。木と木の間、釘を刺した所に柄を差し込んで握ることで、木を剥がせるように加工したものです。そのように道具は使い手各々が自分を使いやすいようにと工夫して独自に加工してカスタマイズするものです。見た目通りのシンプルな構造ですが、パーツを変えたら部分的に修理でき愛用の道具を長く使い継ぐことも出来ます。長年使い込むほどに自分の手に馴染んだものになっていくし、そういうものの使い心地が最も良い、と話してくれました。

最近では、効率化、時短のためにピスト電動ドライバーを使う機会も増えてきましたが、ものの作りの基本は釘となぐり。舞台美術の基本は、昔ながらの釘となぐりで芝居を作っていくこと。吉本さんには道具を大事にすることと共に「基本」を大切にすることも教えていただきました。

※「なぐり」という言葉の語源は、釘を「殴る」からではなく、松の枝をおろしたのから葉をとったものを「なぐり」と言っていたことに由来するそう。柄の材料として、堅い松の木を使っていたのでしよう。

あなたの楽器見せてください  
熊本県立劇場演奏家派遣アウトリーチ事業  
登録アーティスト/箏演奏家  
小路永 和奈 [しょうじなが かずな]

小路永 和奈  
[しょうじなが かずな]  
熊本県立劇場演奏家派遣  
アウトリーチ事業 登録アーティスト

箏

26年前、母に買ってもらったお箏を、今も愛用しています。竜尾近くの年輪が(写真の左上あたり)、個性があつていいなと思って、ひとめぼれだったことを覚えています。それからは、演奏会やコンクールの度にこのお箏で舞台にあがり、高校生の時に受けたコンクールで、『お箏の演奏家になりたい!』という夢まで与えてくれた愛箏です。

大学4年生の時に特注で作っていただいた十七絃は、賢順賞という、この上ない幸せを与えてくれた楽器です。すべてを包み込んでくれるような深く重厚な音色が魅力です。母から譲り受けた二十絃は、私の音楽の幅を広げてくれました。この二十絃のおかげで、いろんなジャンルの方々とコラボレーションをさせていただくようになりました。

欲張って書きましたが、どれも私を導いてくれた大切なお箏たち。これからも一緒に大切に、音楽を奏でていきたいと思っています。



左から 箏・十七絃・二十絃



県劇スタッフリレーコラム  
事業グループ  
佐藤 奈々絵 [さとう ななえ]

コンサートホール考

県劇主催事業の企画制作を主に担当しております。舞台の管理事務も少し。趣味は猫とお酒とクラシック音楽です。

せっかくな紙面をいただきましたので、クラシック音楽好きのスタッフからみた県劇コンサートホールについて語らせていただきたいと思えます。※県劇の公式見解ではなく、スタッフ個人の見解です。

コンサートホールはクラシックを中心とした音楽専用ホールです。県劇が開館した40年前は多目的ホールが主流で、専用ホールとしては草分け的な存在。収容率80%で残響が2秒となるよう設計されており、オーケストラ演奏にとくに適しているホールとされます。

しばしば「おすすめの座席は?」と訊かれますので、少しだけ特徴を…。【1階席前方】 生演奏の臨場感や迫力を愉しみたい方におすすめで。舞台の奥の方がやや見えづらい点があります。

【1階席中央】 大体においてもっとも良席とされ、よいチケット料金をつけられます。バランスよく聴きたいという方に好まれます。

【1階席下手(向かって左)】 ピアノリサイタル等で奏者の手元が見える人気のエリアです。

【1階席上手(向かって右)】 ピアノリサイタル等で、手元を見るよりも音を愉しみたいという通好みな席です。

【2階席中央】 舞台全体がよく見え、臨場感も伝わる良席です。

【2階席ウイング(L2、R2席)】 楽器(とりわけ管楽器)を嗜まれる方がなぜか集まるエリアです。「関係者席」と密かに呼んでいます。後方の座席はヘッドレストのように背面が高くなっており、座り心地もよい席です。

【3階席】 舞台はやや遠く見えませんが、オーケストラを聴くならぜったいココ、とこだわって選ばれる常連様が複数いらっしゃいます。「神の視点」でオーケストラを俯瞰できます。紙面の都合上、簡単ではあります。特徴をご紹介します。違いこそありますが、どのエリアでもクラシック音楽の良さを味わえるようになっていきます。いろいろな演奏を聴きにコンサートホールに足を運び、お気に入りのエリアをみつけていただけると嬉しく思います。

寄稿

振付家・ダンサー  
プロジェクト大山 主宰  
古家 優里

あかちゃんとダンス!  
ワークショップ

2022年9月23日(金・祝)  
市民会館シアターホーム夢ホール  
(熊本市民会館)大会議室

ダンスカンパニー「プロジェクト大山」での活動は今年で16年目になります。大学からの仲間たちと立ち上げたグループですが、今では稽古場に子供たちが走り回る「子連れカンパニー」となりました。私の息子も小さい頃はいつも東京まで連れて行き、ご立派にメンバー面していたのですが小学生になるとすっかりお留守番になりました。

NHK子供番組「みいつけた!」でタツイジョ役で出演するようになつて5年以上経ちますが、そちらの影響もあつてか子供対象のダンスワークショップの機会もよくなります。『あかちゃんとダンス!ワークショップ』も、初めは東京世田谷だったと思いますが、愛知や福島、そして地元熊本でもお声がけいただき、各地の最高に可愛い天使たちに癒されるばかりです。

子育て中、特に乳幼児期はとにかく自分の時間が取れずストレスになります。赤ちゃんと一緒にお母さんも楽しめるダンスの時間、いやお母さんの方こそ楽しめるという思いでやっています。ちょっとクソッと笑えるようなダンスで汗をかくとリフレッシュになるはず。私自身、子連れの稽古は大変でしたが、その時間は大いに楽しく豊かな時間でありました。そして個人的には参加されるパパたちに非常に萌えています!笑。いい時間だなあ〜と。



©松本和幸